

---

# ゴブリンに追われる 【お題スレ】 1

まめ太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゴブリンに追われる 【お題スレ】 1

### 【Nコード】

N9363X

### 【作者名】

まめ太

### 【あらすじ】

お題スレではいつでも作者さんを歓迎いたします。  
鞭と飴持って待ってるよー。

## 神に蹴られた主人公

神様に吹っ飛ばされて異世界へ突入した主人公の名は、舞名。  
まいななし  
舞名七志。

その名が気に食わんと神様に蹴散らかされた男。十七歳、受験を控えた高校生。

「理不尽だー！！」と叫んだ彼の声は誰にも届くことなく夜空の向こうで星になった。

「ここは何処だ。」

まず彼が発した言葉は、あまりにも状況にマッチしなすぎた。

ござっぱりとした木々が見渡す限りに続いていて、どう考えを捻っても森の中としか結論は出ない。季節的には秋なのだろうか、木々の半分は丸ハゲで残る半分はかるうじて赤や黄色の葉がところどころにしがみついている。そのうち丸ハゲになるんだろうな、と思いつつ地面に積もった枯葉の上でじっとしていた。

ヘタに動くと思子になる、とかいう話をどこかで聞いた気がしたので動かないだけだが。

気がついたら立っていただけだ、茂みになったこの場所に、音もなく。

目の前には灰色と緑色を混ぜたような微妙な色の肌をした小人っぽい何か居る。

小人と違って、背丈は七志の半分程度はゆうにありそうだったが、そして頭の形がヘンだ。後頭部が異常にでっぱっていて、それに對して体は細くてガリガリ。

なんとも不格好な人間。いや、生き物。いや、やっぱり人間かも知れない。

なんだろう、アレ。なんて呑気に目を細めて眺めていた。

七志は少々目が悪いのだ。

ソレは一匹だけでなにやらごそごそと動いている。立ったりしゃがんだり、しゃがんだ時には何かの作業をしているような、そんな風な動きをしていた。

なにげなしに、七志は近くへ寄ろうとして一歩足を踏み出した。  
ガサツ

当然だが、派手に枯草を踏む音が響いた。

「うわ、」

「ゴブツ！」

振り向いたその顔を七志はたぶん一生くらいは忘れないだろう。顎まで裂けた口にはギザギザの牙が並び、目は白目も黒目もなく真っ赤、そしてなにより、手には血まみれの剣を握っていた。

ついでに目に入る、たぶんその剣の元々の持ち主。  
なんで腹を裂いて中身をぶちまけてあるんだろう、と思った時には自動で回れ右をして全力疾走に移っていた。

「ギギー!!!」

なにかデカい声で叫んでいる、と思う間に灰緑色の化け物は三匹に増えていた。

「うわ、増えた！」

右から回り込んでくる化け物の手には棘だらけの棍棒。

振り上げたトゲ棍棒が、七志目がけて襲いかかってくる。

目を瞑って軸足を左に進路を修正、よろめきながらもなんとか避けた。

手をついて方向転換に利用した立木の幹に、さきほどの剣が唸りをあげて突き立つ。

「ひいっ！」

飛び散った血が七志の頬にべしゃりとかかった。

余裕もない中で無理に振り返ると、三匹の化け物がなにやら喚き

ながらピョンピョンと飛び跳ねている姿が遠くに見えた。追いかけるのを諦めたらしい、そうは思ったが、ふらつく足はまだ歩みを止めようとはしてくれなかった。

勝手に走り続けている。いや、もう走ることは出来ずに歩いている。

「あれって……まさか、ゴブリンとかいうモンスターか？」

苦しい息のまま、歩みも止めないままで、七志が呟いた。肩で息をして、喉は貼り付いたような渴きを訴えている。唾液は出てこない。喉が乾きすぎると、痛いのだと知った。

とにかく町か村を見つけて……いや、人を見つけて、いや、贅沢は言わない、水が欲しい。

「川、どっかに川くらいあってくれよお、水、」

泣き事を、半ばヤケクソで呟いただけでも声は喉に絡んで上手く言葉にならなかった。

ただ単に走っただけでコレでは、この先、どうなるんだろうか、とは考えないようにした。

もっと恐ろしいこと、あのゴブリンが他にもうじゃうじゃ居るかも知れない、という考えは消すことさえ出来ないままだ。

幸運なことに、その後は何者にも出くわさないままで、川のせせらぎを聞きつけた。

「やった、川だ、下流へ行けば森を出られるはず！」

その頃には、さすがに喉の渴きも緊急を要するほどではなく、思考にも余裕が出来ていた。

川があれば下流には平野がある、平野というのは大抵が田んぼや畑になって、人の住む集落が出来ているものだ、七志の知る常識で言えば。

軽い傾斜は、すぐに険しい岩肌になり、そこが谷間に流れる溪流

だという事を教えた。

そしてなにより、今まで続いた幸運がここで尽きたことも教えてくれた。

「……なんだよ、アイツ等。」

自分の声だというのに、絶望的な響きに聞こえた。

灰緑色の肌、不格好なハゲ頭。真つ赤な目と裂けた口。

けれど、大きさが違う。谷を見下ろすここから見ても解かる、巨体。

血まみれになった人間の死体を見下ろしている。

さつきと同じくらいの奴を二匹従えていた。

見つからないように身を隠し、チラチラと様子を伺う。

たぶん、ホブゴブリンとかいう奴だ、ゴブリンの上位モンスターでゲームではお馴染みの奴。

序盤あたりに出てきて、すぐに経験値にもならなくなってしまっような奴。

リアルで出会うことがこんなにも絶望的だなんて思いもしなかったが、こうなったらやる事は一つ。

「雑魚とか呼んでごめんなさい、謝るからさつきと行っちゃってくださいー、」

神頼みしかなかった。

## ゴブリンとランデブー

観察するうちに気づいた事が幾つかある。

ゴブリン達はひどく興奮しているように思えた。

後から2匹増えたが、そいつ等は怪我をしていて七志が見たヤツとは違う。

少なくとも10匹以上は居そうな気配だが、後から来た2匹は別の方向から来た。七志が見た、殺されていた人間にやられた傷ではないという事になる。

あの時の死体にしてもそうだ、思い出せば、村人Aという感じじゃなかった。

増えすぎたゴブリン。

それを、人間が殺しに来ているのだとしたら……。

だとしたら、返り討ちにあってしまった人間はこれで二人目だ。

よくよく目を凝らせば、血まみれの死体は武装しているようにも思う。

その武器をゴブリンたちは奪い取って振り回しているようだ。

手入れされた武器を持つゴブリンが他にも居る。連中に武器の手入れなんて芸当は出来ないと仮定すれば、あの武器は人間から奪ったものだろう、さっき見たように。

もしかしたら、他にも狩人が居るかも知れない。こんな化け物が居ることを、地元の討伐隊が知らないわけがないから、きっと大勢の人間で一気に攻め込んだに違いない。

光明が見えた。

討伐隊に合流しさえすれば、助かる。

一匹のゴブリンが、鼻をひくひくとさせ始めた。

「ゴッ！」

こちらを指差した途端、一斉にその場の化け物たちが七志の方を見た。

「やめてっ！」

思わず叫んだ言葉に意味はない。慌てて逃げようとして、足が滑った。

岩場を転げ落ちて、かすり傷のみで済んだのは不幸中の幸い。けれど。

神様はきつと僕をいたぶっている、視界の端に映るのは駆けてくるゴブリンの群れ。

いつの間にか谷間のゴブリンは10匹に増えていた。

ヤケクソでその場にあった大き目の石を両手で持ち上げる。

先頭の一匹にめがけ、投げつけた。

「グガ！」

喉元で受け止めながらひっくり返ったそいつは、ぐしゃりという音とともに動かなくなった。

緑色の液体が岩だらけの川べりに広がる。

他のゴブリンが動きを止めて、潰れたゴブリンを遠巻きに囲む。

そういえば、ゴブリンってそんなに頭良くないって設定だった、

と思いながら、七志はその隙に岩場を移動していた。ゴブリンたちは思った通り、七志のことを忘れていたようだ。

振り向いて連中を確認する。

勇気ある一匹が近づき、石をどけていた。一瞬確認しただけで、

すぐに七志は前を向き必死に岩を這う。走ることは無理だった、巨岩が連なり、走れる場所ではない。

遠方で怒りに満ちた咆哮が幾重に響いた。

あまりにも不利な場所に来てしまった。

向こうはぴよんぴよんと飛び跳ねていて、足場の悪さをものともしない。

こちらは、走るところか立って移動することさえままならない。あれほどに空いていた距離がみるみると縮まっていく。もちろん、あの巨体も一緒だ。

「ちくしょう！」  
きっとあの神様は僕に死ねと言ってる、湧き上がる理不尽への怒りで七志が叫んだ。

閃いたのは一瞬のこと。すぐさま水に飛び込む。

この辺りは淵になっていて、溪流は溜まり深い緑色の水を湛えている。

どうせ追ってくるのは解っているが、連中の持つ武器だけは何と出来るはずだと踏んだ。

七志の読みは当たり、ゴブリンたちは水中の的に向かって、手にした武器を投げ始めた。

大きく息を吸う。

『潜水してしまえば、勢いを殺された武器で深手を負わされることなんてない！』

幾つもの凶悪な武器が、血の赤い帯を引きながら水底へと沈んでいった。

「ぶはっ！」

浮き上がり、確認。ぜんぶ素手になっている。

的が再び出てくるのを待つ、という程の知恵はない。それはさつき確認済みだ。

次々と水に飛び込んでくるゴブリンたちを見る。

セオリーではこういうモンスターは泳げないものだが、リアルは違うらしい。一匹だけ、例の巨体がどうしようかと迷っている風でおろおろしていた。

向こう岸へむけて泳ぐ。

幸い、ゴブリンは泳ぎの名手というわけでもないようで、不恰好

ななりでもたもたと水中を移動していた。これならまた少し時間が稼げそうだ。

一匹、渦に巻かれて流されていった。残るは8匹。

泳ぎきつたところで、手を掴まれた。

心臓が止まるかという衝撃で、顔を上げる。そこに居たのは人間で、今度は急激に力が抜けた。

「なにやってんの！ 早くあがりなさいよ！」

突然重くなった腕に驚いたようで、その子は大声で七志を叱咤した。

ブロンドの髪の女の子。いや、女性。いや、たぶんやっぱり女の子だろう、うん。

緊張感が一気に抜けてしまつて、妙な笑いを貼り付けながら、七志は独りつぶやいていた。

後方で、派手な水音がして振り返る。

あのホブゴブリンが意を決して、飛び込んだようだった。

だが、少女の助けを借りたおかげでやりやすくなった。

ついでなので、そこらにある手ごろな石を持ち上げ、迫るゴブリンを2匹ほど沈める。

こんな場所なら鈍器で殴って気絶させるだけで勝ちだ。

「やるじゃん。でも深追いは禁物、逃げるわよ！」

「あ、ああ、」

なんだかよく解らないが、この少女についてゆけば本隊に合流出来るのだろう、と七志は思い、後を追った。

俺、この戦いが終わったら……

「まさかこんなに居るなんて想定外よ、こんな仕事、受けるんじゃないかったわ！」

背を向けていた一匹を背後から襲い、少女は毒吐いた。

ゴブリンの首に短剣を突き入れ、横へ擦じって引き裂く。

声ひとつ上げず、緑の体液をまき散らしながらゴブリンが倒れた。手にあつた剣をもぎ取って、七志に投げよこす。

「使つて。」

あたしはこつちの方が得意だから、と血を振り払つた短剣を見せ  
て笑つた。

「それにしても、ヘンななりしてるわねえ？ どこから来たの？

海の向こう？」

「えっと、なんて言うか……つて、もう追いついてきた！」

「アイツの相手は無謀だから、今は逃げるわ！」

名前も知らぬ少女の焦燥ぶりに不安がもたげる。

まさか、の念が。

まさか、本隊とか、討伐隊とか、そついつのは……居ない？

胃の底へ冷たいモノが落ちていく。

「夜になれば、他の連中は巢へ戻るわ！ アイツ等さえどうにかすれば……！」

ゴブリンは夜行性ではないらしい、それで彼女が不利な川べりから移動しない理由が解かつた。

ヘタに行動範囲を広げれば、落ち着いてきている他のゴブリンたちを興奮させてしまうからだろう。

夜になって寝静まつた後で、脱出するつもりか。

それには最大の難点が残されていたが。

とびきりデカイ咆哮。あの巨体が淵から上がれず、もがいている

のだろう。彼女が居なければ、ヘタをすれば自身が同じ目にあつて、最悪、水中での乱戦を強いられていた。

咄嗟の判断だったが、そう考えればゾツとする。無謀だった。

くるり、と反転する。向かってくるゴブリン、その数5匹。

無謀というなら、あのホブゴブリンをむざむざゴイツ等と合流させるほどの無為無策はない。

今なら二人だ。少女の方は戦闘に慣れてもいる。おまけに奴等は素手。

「無茶よ！」

「なんとかなる！ なんとかしないと、それこそ絶対に助からない  
！！！」

七志の意図を読み取り、少女も身構えた。

チャンスなのだ、あの巨体が水中でもがいている今、この数分で残りを片付ければ。

二対一！

飛び掛かってくるゴブリンは、一斉に少女をまず狙った。

喉元へ牙を向けた一匹を七志が横殴りに弾き飛ばした。

「きゃあああ！」

絶叫にも近い。完全に舐めていた、リアルなゴブリンは素手であるうとその牙がすでに凶悪な武器。

腕に食らいついた者、肩に牙をめり込ませる者、集団での狩りは連中の方が上手だ。

少女の手のナイフをもぎ取り、肩に居るゴブリンの眼窩に突き刺した。もう片方の手で腕を食いちぎろうとするいびつな後ろ頭を半分。今度、悲鳴を上げたのはゴブリンたちだ。

片足は少女の脇腹を食い破ろうと狙ったゴブリンの口に。

阻止しただけだ、噛みつかれた牙が靴を通して足に届く。そのまま思い切り蹴り上げて引き剥がした。

最後の一匹は太ももに食らいつき、その肉を食い千切ることに成功していた。

即座に七志が踏み潰して殺す。

「うっ……、」

少女に肩を貸し、慌てて逃げる。

見回すと、仕留め損なっただと思った2匹は這いずるだけで無力となっているのが知れた。

目にナイフを生やしてのた打ち回る一匹と、蹴りで顎が外れ怯えた目でこちらを見る一匹。

「止血しないと、どこか、隠れる場所は……っ、」

咄嗟の思いつきで行動するわけにはいかない、今度こそ絶体絶命。怒り狂ったホブゴブリンの野太い叫びが響く。

小さな洞窟、いや、岩場の中で自然に出来上がった巨岩と巨岩の隙間。

そこへ滑り込んだ。

奥行きがある事を願って。

「ちくしょう！ またやった！ またしても、やっちゃった！」

絶望的な状況だ、奥行きはほとんどなかった。

奴が腕を伸ばせば届くだろう、そして捕まえられて引きずり出される。

それほどの距離しかなかった。

少女の息も上がっている、止血をする暇がないのだ、ホブゴブリンはもう追いついている。

少女を奥へ押し込み、七志は密着する形で出来るだけ身体を天井に貼り付かせる。

胸に剣を構え、その時を待った。

太い腕がなんの躊躇もなく伸ばされ、洞窟に侵入する。

少女に届く前に剣を叩きつけた。

「ゴアア！！」

鮮血をまき散らしながら、腕が引つ込む。

この最後の武器だけは持つていかれるわけにはいかない、もう選択肢を間違えるわけにはいかない。

叩きつけるのみ。決して突き刺してはいけない。

再び、逆の腕が伸びた。もう一度剣を叩きつけて追い返す。

洞窟の向こうでホブゴブリンが転げまわり、暴れているのが見えた。

それでも怒り狂った化け物は、二人を諦める気にはなっていない。今度は、顔を直接洞窟に向け、中を覗き込んで咆哮した。

野太い声。すでに周囲は暗く、夜の時刻に入っているだろうに、この付近一帯にも届きそうな、馬鹿でかい声だ。

獣が騒ぎ始めた。

夜に入ったことで、余計にこの咆哮が遠慮なく静かな空気を掻き回している。

「……まずいわ、他のゴブリンが気づく……」

胸をかすめた不安を、確定にされた。

腕を伸ばしてくる度に叩いて戻す。顔を出すか、腕を突っ込むか、ホブゴブリンはそれ以外のことは考え付かないようだった。

「いちかばちかだ、」

「え？」

顔か、腕か。

洞窟に籠城してから初めて、七志は構えを変えた。

身を低く、右肩を前へ、剣の柄元は肩、肩甲骨の窪みへ固定し、力の分散を防ぐ。

左手で柄をしっかりと掴み、右手は刀身を直接掴んだ。

少女が見たこともない構え。

当たり前だ、剣術など知らない七志のオリジナル。即興で作り上げたもの、必要にかられて。

『大博打の型』とでも呼ぶのが相応しい。

確率、2分の1。

「ゴアアア!!」

咆哮を聞くのを待つてはいない、タイミングを読んで、化け物が動いた瞬間に仕掛けていた。

捨て身の突進。

出てきたのは、顔！

「もらったあ!!」

灰緑色の肌、真っ赤な両目のど真ん中、眉間の位置に狙いを定めて。

渾身のタツクルをかけた。

切っ先が瞬間、抵抗したかに思えたがすんなりと骨を貫き、その柔らかい脳髓にまで届き、そして後頭部の頭蓋を破った。

どすん、という手応え。

断末魔と共に、巨体は思い切り伸び上がり、七志を引きずり出した。

そして、そのまま後ろへ倒れ込んだ。地響きを上げて。

俺、この戦いが終わったら……（後書き）

いちお、これで完結状態です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9363x/>

---

ゴブリンに追われる 【お題スレ】 1

2011年10月26日03時07分発行